

柳永の遊仙詞—「巫山一段雲」を中心として—

藤原 祐子

“youxian ci” (遊仙詞) of Liu Yong — focus on “Wushan yi duan yun(巫山一段雲)” —

Yuko FUJIWARA

要旨

北宋の大詞人柳永は、詞という文学ジャンルに様々な新しい主題を取り込んだ。そのうちの一つに、「遊仙」と呼ばれる一主題がある。本稿では最初に、遊仙の主題を以て詠まれた柳永の「巫山一段雲」五首が、どのような内容をもつものであるか、簡単な訳注を附して解説する。その上で、柳永の遊仙詞が中国古代遊仙文学の流れの中の、どこに位置づけることが出来るのかを考えていく。唐五代までの遊仙文学は、「現実に対する不満・諷刺」「国家・君主に対する言祝ぎ」をその二大潮流とする。柳永の「巫山一段雲」はどちらかと言えば後者に傾倒するが、人の長寿を祝するという側面がより強く、さらに女仙がしばしば登場する所が特徴的といえる。南宋以後、詞の分野には自分や身近な人々の誕生日を祝う「寿詞」というジャンルが確立するが、その先駆けとなるのが柳永のこれらの詞であり、しかも内容的に一つの典型を作ったといえることができる。また、柳永が「巫山一段雲」という詞牌を用いて遊仙を詠ったことが、金代以後の全真教道士たちの作詞に強い影響を与えたと考えられる。柳永の遊仙詞は、従来あまり注目されることがなかったが、このような金朝や南宋以後の詞壇に対する影響は、決して看過してよいものではない。

キーワード：柳永、遊仙、巫山一段雲、寿詞、道士。

一、はじめに

北宋の詞人柳永は、中国を代表する詞の大家であり、その詞学史上の貢献については、これまで様々な評価・研究がされてきている(1)。貢献の主なものとしては、まず慢詞という長い形式を積極的に作り、確立・発展させたこと。自度曲と呼ばれる自作のメロディを作ったこと。代言体とよばれる「語り」の手法に加え、口語を多用することで、それまでの類型的な作品とは一線を画した詞風を作り上げたこと。そして、それまでは「閨怨」に限定されていた詞が詠う主題を、様々な分野に拡大したこと等が挙げられる。これらのうち、本稿では特に、最後に挙げた「主題の拡大」について着目する。

柳永が作って以後、詞の中に定着した主題の代表としては、宦游の苦しみや旅の寂しさを詠う「羈旅行役」がある。彼の羈旅行役詞に対しては、宋代当初から現代に到るまで、極めて高い評価が与えられてきた(2)。現在、柳永の作品を論じる場合に取り上げられるのは、「閨怨」でなければ「羈旅行役」、といっても過言ではないほどであろう。その一方で、その他の主題

を扱った作品に対する考察や評価については、やや等閑にされてきたという印象を免れない。もちろん、「閨怨」「羈旅行役」を詠う作品の数に比して、その他の作品の絶対数が圧倒的に少なく、目立たないことは確かである(3)。しかし、後代への影響という観点からすると非常に興味深い作品も、また存在する。

本稿では、それらの中から「巫山一段雲」五首をすくい上げてみたい(4)。なお、本稿では作品の製作年代や順序などを云々することは基本的にしない(5)。

二、柳永「巫山一段雲」五首訳注

本節では、まず柳永の「巫山一段雲」五首を紹介する。管見の限り、この五首についてはこれまで日本語での訳注が存在しない。そこで、やや難解な表現も多いが、わかる範囲での訳注を試みておきたい。なお、「其一」から「其五」までの数字は『全宋词』に従っている。引用に当たって、漢字は常用字体で統一した。詞中の「、」は句点、「。」は押韻箇所であることを示す。また、韻字は清・戈載『詞林正韻』の部立てを併せて記し、「」で換韻を表した。

「其一」

六六真游洞，三三物外天。九班麟穩破非煙。何処按雲軒。 昨夜麻姑陪宴。又話蓬萊清朝。
幾回山脚弄雲濤。彷彿見金鼈。

世俗の外にある三十六の洞天と九つの天に遊べば、仙人を載せた斑模様の龍がゆっくりと、めでたい五色の雲を破って現れる。雲の車はどこを巡っているのだろう。 昨夜は麻姑が宴に侍り、「蓬萊の浮かぶ海は浅く清らかです。私は何度その山裾に雲のような波が打ち寄せたり、山を載せる金の大きな亀の姿を見たりしたことでしょう」と語った。

- 六六真游洞—「六六洞」は道教の聖地とされる「三十六洞天」。『茅君内伝』に「大天之内、有地中之洞天三十六所」と言う。
- 三三物外天—「三三天」は九天。『楚辞』「天問」に「九天之際、安放安属」とあり、その王逸注は「九天、東方皞天、東南方陽天、南方赤天、西南方朱天、西方成天、西北方幽天、北方玄天、東北方變天、中央鈞天」と言う。前注の「三十六洞天」とともに、ここでは神仙の世界を象徴する。
- 雲軒—雲の車、仙人の乗り物。
- 麻姑—仙女。『神仙伝』によれば、漢代に道士王方平の呼び出しによって、年若く美しい姿で降臨し、「接待以来、已見東海三為桑田。向到蓬萊、水又浅於往者会時略半也、豈將復還為陸陸乎」と言ったという。後段の三句はこの逸話を踏まえ、蓬萊山を取り巻く海が何度も陸地になりまた海になるという、長い時の経過をいうものと考えた。
- 金鼈—金色の大きな亀。『楚辞』「天問」王逸注所引『列仙伝』に「有巨靈之鼈、背負蓬萊之山而扑舞、戲滄海之中」と言う。この一句は、水がなくなってその下を支える「金鼈」が見えるようになることをいうのであろう。

〔韻字〕天煙軒（第七部平声） 宴浅（第七部仄声） 濤鼈（第八部平声）。

「其二」

琪樹羅三殿，金龍抱九闕。上清真籍總群仙。朝拜五雲間。 昨夜紫微詔下。急喚天書使者。
令齋瑤檢降彤霞。重到漢皇家。

美しい樹木が三つの宮殿を取り囲み、金色の龍が九つの門を抱き抱えている。上清に属する凡ての神仙が、五色の雲の中、跪いて拝謁する。 昨夜、紫微宮が詔を下し、急いで天書

を届ける使者が呼び出された。天書の入った玉の文箱を贈るため、彩雲に乗った仙人が再び漢の皇帝のもとに降臨した。

●上清－道教でいう三つの清境の一つ。『雲笈七籤』卷三に「其三清境者、玉清、上清、太清是也」と言う。 ●重到漢皇家－漢の武帝は道教に傾倒し、泰山で封禪を行ったことで知られる。彼にまつわる伝説を記した『漢武帝内伝』には、西王母が彼のもとに降臨し、天書を与えたという記述がある。ただし、ここで「漢皇家」が指すのは、武帝ではなく宋の真宗である。真宗は武帝と同じく道教を尊崇した。『宋史』「真宗本紀」によれば、彼の治世である大中祥符元年（一〇〇八）五月と同六月の二度、天書降臨が起きている。本詞の「重到」は、この二つ目の天書について言ったものと考えられる（6）。

〔韻字〕 関仙間（第七部平声） 下者（第十部仄声） 霞家（第十部平声）。

「其三」

清旦朝金母，斜陽醉玉龜。天風搖曳六銖衣。鶴背覺孤危。 貪看海蟾狂戲。不道九関斉閉。
相将何処寄良宵。還去訪三茅。

早朝に西王母に朝見し、夕方には玉龜山で酔っ払う。風が軽い仙衣を翻す。鶴の背中に乗れば何と高いことか。 月が踊り狂うのを夢中で眺めていると、気づかぬうちに天界への入り口が全て閉まってしまった。これからどこでこの良き夜を過ごそうか。茅家三兄弟でも尋ねるとするか。

●金母－西王母。『真誥』「甄命授」に「所謂金母者、西王母也」とある。 ●玉龜－玉龜山。仙人が住むという。梁武帝の「上雲楽・玉龜曲」に「玉龜山。真長仙」という。 ●海蟾－月。月にはヒキガエル（蟾）が住んでいるという伝説に基づく謂いで、月をまた「蟾蜍」ともいう（7）。 ●不道－気づかない。張相『詩詞曲語辭匯釈』「不道、猶云不知也、不覺也、不期也」。 ●相将－これから、この後。「将要」というに同じ。張相『詩詞曲語辭匯釈』「相将、猶云行将也、侵尋也」。 ●三茅－漢の景帝の時代に昇仙したとされる茅盈・茅固・茅衷の三兄弟を指す。唐・鄭谷の「池上」詩に「仙山如有分、必擬訪三茅」と見える。

〔韻字〕 龜衣危（第三部平声） 戲閉（第三部仄声） 宵茅（第八部平声）。

「其四」

閨苑年華永，嬉遊別是情。人間三度見河清。一番碧桃成。 金母忍将輕摘。留宴鼇峰真客。
紅猶閑臥吠斜陽。方朔敢偷嘗。

仙人の世界は永遠に続くが、宴は特別に楽しいもの。人間では三度黄河が澄み、碧桃が一度熟した。 西王母はその碧桃を軽々に摘みとるに忍びず、残しておいて仙客をもてなしたのだ。見張りの赤毛の犬がのんびり寝そべって、夕日に向かって吠えていても、東方朔はどうしてそれを盗み食いしようか。

●別是情－別の趣がある。「別是～情（味）」という言い方が、宋词には散見する。冒頭の二句はわかりにくい、「嬉遊」は楽しみ遊ぶことを意味することから、宴会などの場を指し、永遠の時を持つ仙界はそれだけでも楽しいが、宴などの遊びはやはり別の楽しさがあることをいうものと考えた。 ●河清－黄河の水が澄む。『拾遺記』に「黄河千年一清」とある。それを三度見るということは、すなわち三千年が経つことを意味する。 ●碧桃－西王母が漢武帝に賜ったという仙桃。『漢武帝内伝』によれば、三千年に一度実をつけ

るとされる。 ●方朔—漢の武帝に仕えたという東方朔のこと。伝説では、前注の仙桃を三回盗み食いして西王母の怒りに触れ、人間に落とされた謫仙人であったとされる。〔韻字〕情清成（第十一部平声）摘客（第十七部入声）陽嘗（第二部平声）。

「其五」

蕭氏賢夫婦，茅家好弟兄。羽輪飄駕赴層城。高会尽仙卿。 一曲雲謠為壽。倒尽金壺碧酒。
醺酣争撼白榆花。踏碎九光霞。

蕭氏の立派な夫婦と、茅家の良い兄弟。彼らはみな鸞鶴の引く乗り物を駆って崑崙山に昇仙した。そこでの盛大な宴に列席するのは仙界の貴人たちばかり。 雲謠の曲を奏でて長寿を祈り、金の壺の美酒を飲み尽くす。大いに酔っ払い、争って白榆の花を揺さぶり、色鮮やかに光る霞を踏み散らかして楽しもう。

●蕭氏賢夫婦—春秋時代秦穆公の時の人蕭史と、その妻で穆公の娘弄玉の夫婦をいう。『列仙伝』巻上「蕭史」によれば、蕭史は簫を吹くのが上手で、鳳凰の鳴き声のような音を出せた。その音に惹かれて、鳳凰が来るようになり、数年後二人とも鳳凰と共に昇仙した、という。 ●茅家好弟兄—前掲「其三」の「三茅」注参照。 ●層城—崑崙の山上にあるという高い城壁。また、ひろく仙郷を指す。「増城」とも書かれ、『淮南子』「墜形訓」には「中有増城九重、其高万一千里百一十四步二尺六寸」と見える。 ●雲謠—仙界の褒め歌。『穆天子伝』に、西王母が「白雲在天」で始まり「将子無死」で終わる、穆天子の長寿を言祝ぐ歌を謠ったとある。後にその歌を「白雲謠」、略して「雲謠」と呼ぶようになった。また、『漢武帝内伝』で西王母が漢武帝のために奏させた「雲和之笛」で吹いた曲とする説もある。 ●白榆花—仙界の植物。『樂府詩集』巻三十七「隴西行」古辞に「天上何所有、歴歴種白榆」と言う。

〔韻字〕兄城卿（第十一部平声）寿酒（第十二部仄声）花霞（第十部平声）。

三、「遊仙」及び「巫山一段雲」

前節で訳注を試みた「巫山一段雲」五首は、一読してすぐに気づくように、いずれもその内容に神仙思想というべき要素を含んでいる。薛瑞生氏は「其一」の題解で「樂章集中有五首巫山一段雲、開詞中遊仙之先河（樂章集中に五首の「巫山一段雲」詞があり、詞で遊仙を詠む先駆けとなった）」といい、宇野直人氏は「巫山一段雲」五首の題材を「道教」としている(8)。そこで、本節ではまず、中国の古典詩歌における遊仙がどのように詠われるものであったのかについて、簡単に概観しておきたい。

中国において、遊仙が詩歌をはじめとする文学作品の主題として登場するのは非常に古く、長い伝統をもつ主題の一つと言える。その起源としては、一般に屈原が現実の世界に絶望して天界に遊ぶ内容を詠った『楚辞』「離騷」に、しばしば求められており、この現実に対する不満故の「天界遊行」は、その後遊仙を詠う際の一つの規範となっていく。魏・曹植の「遠遊篇」はその代表格であり、六朝・郭璞の「遊仙詩」もやはり「自らの不満を詠ったもの」と解されている(9)。一方で、『漢書』「礼楽志」や宋・郭茂倩『樂府詩集』が収録する郊廟歌辞や燕射歌辞といった樂府類には、天界を遊行し仙薬を授与される、長生を賛歌するといった、王朝や皇帝に対する言祝ぎを内容とするものが多数みられる。例えば、漢・武帝が作らせたという「郊祀歌」には、「延寿命、永未央（寿命を延ばし、永えに未だ央きず）」や「託元徳、長無衰（元

徳に託し、長しえに衰える無し」といった歌辞が見える(10)。

要するに、中国における遊仙文学を、乱暴を承知で分類すると、屈原以来の現実世界への不満を、仙人となって理想の世界である天界に遊行することで昇華しようとする「天界遊行」型と、楽府や郊廟歌に連なる不老長生や登仙の願望を言祝いで詠う「言祝ぎ」型の、の大きく二つに分けることができるだろう(11)。

では、唐代半ば以降に成立した詞においては、遊仙はどのように扱われていたのだろうか。『全唐五代詞』には、断句を含めて二千七百首が収録されている(12)。その中には、例えば敦煌曲子の「謁金門(仙境美)」や「謁金門(常伏気)」のように、仙界の情景を詠ったものがあり、また唐・李徳裕の「歩虚詞(仙女侍)」のような詞牌名からして道教思想に関わることが見て取れる作品(13)、唐・温庭筠の「河澆神(河上望叢祠)」のような神迎え等の民間宗教儀礼との関連を窺わせる作品もあるが、やはり例外的である(14)。唐五代において、詞で遊仙を詠うという発想は、まだほとんどなかったと言って良いだろう。北宋の最初期に、柳永が「巫山一段雲」のような遊仙詞を作ったのは、その意味でやはり画期的であった(15)。

次に、遊仙を詠うに当たって柳永が選んだ詞牌「巫山一段雲」についても、少し考えておきたい。柳永は多くの自度曲を作り、長い形式である慢詞の名手として知られるが、「巫山一段雲」は短い形式である小令に分類される。また、宋以降に成立した新しい曲や柳永の自度曲ではなく、唐・崔令欽の『教坊記』「曲名」の条に記録される、所謂「唐教坊曲」の一つである。

「巫山一段雲」には、格律上大きく二つの体がある(16)。一つは、①双調四十四字、前段四句三平韻、後段四句三平韻で一韻到底の体、そしてもう一つは②双調四十六字、前段四句三平韻、後段四句、兩仄韻兩平韻で二度換韻する体である。

① 5, 5。7。5。／5, 5。7。5。

② 5, 5。7。5。」／6。6。」7。5。

「／」は前後段の切れ目を示している。両者の違いは、換韻の有無と、後段最初の二句の文字数及び押韻の仕方が、①は「5、5」、②は「6。6」、という二点にある(17)。以下では、便宜的に①を「5、5体」、②を「6。6体」と呼ぶ。

詞牌名「巫山一段雲」の由来としては、楚・宋玉の「高唐賦」に見える、楚の懐王が高唐に遊び昼寝をしている時に、一人の神女が現れて枕席を共にしたという伝説が挙げられる(18)。神女は去り際、「私は朝には雲となり、暮れには雨となって、日々陽台のもとにおります」と言い残す。この伝説によって、「巫山の雲」といえば男女の艶情や逢瀬を想起させることになった。実際、唐五代の作品には、「陽台一夢」(李暉)、「特地拝龍顔」(歐陽炯)、「朝朝暮暮楚江辺」(毛文錫)、「一夢杳無期」「雲雨朝還暮」(李珣)といった語がみえ、何らかの形で女性と王の交情が想起させられる内容となっているものが多い(19)。柳永がこの詞牌で遊仙を詠ったのも、「巫山の神女」から「神仙世界」という連想が働いたためであろう。ただし、柳永は高唐賦の故事を一切踏まえずに「巫山一段雲」を作っており、その点において唐五代の作品とは一線を画している。

さらに、もう一つ指摘しておかねばならないのは、「巫山一段雲」は唐の教坊曲に由来する古い詞牌でありながら、現存する唐宋の作例は極めて少ない、ということである。『全唐五代詞』が収録するのは、先にも名前を挙げた李暉・歐陽炯・毛文錫・李珣の四人にそれぞれ二首ずつの全八首、『全宋词』に到っては柳永の五首を除けば、杜安世一首と仇遠一首のみで、全七首に過ぎない。柳永がこの詞牌を用いて一人で五首も作ったのは、異例中の異例と言ってよい。ちなみに、柳永と李暉のみ「6。6体」での作例、残りは全て「5、5体」であり、両方

の格律で作っている人物はいない。

四、遊仙と祝寿

では、柳永詞の内容について検討していくことにしたい。「巫山一段雲」五首は、柳永の別集『樂章集』に並んで収録され、しかも全て遊仙の要素を強く持つという共通点があることから、ややもすれば連作の如くまとめて取り扱われる(20)。しかし、その内容のばらつきからすれば、この五首はおそらく同一の背景の下で同時に作られたものではあるまい。また一方で、先にも述べたように、中国における遊仙文学が詠うのは「天界遊行」と「言祝ぎ」に二大別ができる。当然、柳永詞もこの二つの流れと無関係に存在することはありえないだろう。このことを踏まえた上で、五首の作品が遊仙を使って何を詠うのか、どのような背景を持つのか、従来の作品と比較して柳永詞の特徴は何であるのか、といったことについて、一つ一つ考える必要がある。

おそらく、五首中で最も遊仙らしい作品は、「其三」であろう。「其三」の前半では、朝西王母に拝謁し、夕方仙山の上で酔っ払う、仙人の衣を着て鶴に乗って飛ぶ、と詠うように、自らを神仙の一人になぞらえ、天界に遊ぶさまが伸びやかに描かれる。ついで、後半では、おそらく鶴に乗って人界へ来たのであろう、月を眺めていたら、いつの間にか天界への帰り道が閉じてしまっていた、と述べる。しかし、彼は帰れなくなったことを悲観するようでもなく、何処でこの良い夜を過ごそうかと思案し、仙人仲間である茅家の三兄弟でも訪ねるか、と言うのである。天界と人界を自由に行き来する、飄々とした仙人の姿が目には浮かぶようである。形式的には、「天界遊行」型の遊仙詞に属すると言えるだろう。

だが、「天界遊行」を詠う遊仙文学は、先にも述べたように、基本的には現実世界で容れられることのない苦しみや憤りの表出として、遊仙を用いたものが多い。翻って、柳永は当時詞人としては有名であったが、その作品の内容や詞人としての名声が却って出世を妨げることにもなった人物であり、不遇に耐えかねて宰相に直訴しに行った、という逸話も残る(21)。とすれば、「其三」後半に見える「九関斉閉(九関 斉しく閉ず)」という表現は、出世への道が閉ざされたことを暗示していると考えることが可能である。だが、例えば屈原は自分を受け入れない君主や世の中に絶望したが、柳永は意気消沈も絶望もした様子を見せない。却って、「茅家三兄弟」すなわち「仲間」のところにでもいって良き夜を過ごそうと言い放つのである。

このような態度は、例えば科挙落第を詠じた彼の「鶴冲天(黄金榜上)」詞が「忍把浮名、換了浅斟低唱(浮名を把って、浅斟低唱に換^かえうるに忍びんや)」と詠うのと通じるものがあるように思われる。要するに、ある種の「開き直り」である。彼にはまた、人に推挙されながら、皇帝からは「詞でも作っておれ」と一蹴され、「奉聖旨填詞柳三变(聖旨を奉じて填詞する柳三变)」と名乗った、という話も伝えられる(22)。「其三」が描く「天界遊行」は、現実に対して「開き直り」、たとえ虚勢であってもそれを楽しもうとする、柳永の処世観が反映されていると解することができるだろう(23)。

続いて、「其二」をみてみたい。まず、この詞の特徴は、第二節における注釈でも指摘したように、漢武帝の事跡に仮託して、実際には柳永の時代である真宗治世の出来事を詠っていると考えられる点にある。このような、当代の出来事を過去の時代に仮託して述べる手法は、例えば唐・白居易の「長恨歌」が玄宗皇帝を「漢皇」と表現するのがよく知られるように、直言することが何かしらの理由で憚られる場合にしばしば用いられた。おそらくそのために、薛瑞

生氏はこの作品を「真宗が道教狂いであったことを諷刺するもので、宋词の中で唯一無二である」と述べ、柳永が漢武帝に仮託した理由を諷刺のためと解釈する(24)。確かに、真宗の道教に対する傾倒は、泰山の封禪を行ったりしたことなどからも窺えるように、一定の度を超していたらしい。真宗に降されたという「天書」も、実際には側近の王欽若の捏造であったとされており、それを本物として熱狂した真宗に対する批判を読みとることは可能であろう。柳永は「其三」からも窺えるように、屈折のある人物であったと考えられるため、この読み方には一定の説得力がある。

しかし、一方で次のように考えることも可能ではあるまいか。柳永は、本詞の他にも道教関連の儀式を詠ったと考えられる詞を作っている。例えば「玉楼春(昭華夜醮連清曉)」詞や「玉楼春(鳳台鬱鬱呈嘉瑞)」詞には、道教の祭壇を意味する「醮」「醮台」の語が見える(25)。これらの末尾には、それぞれ「從此乾坤齊曆数(此れより乾坤 曆数に齊し)」、後者は「齊共南山呼万歳(南山と齊しく万歳を呼ぶ)」と、国家や皇帝の長命長寿を言祝ぐ言葉が置かれている。このような言祝ぎは柳永の他の作品にもいくつか見えるのだが(26)、そもそも作品中に言祝ぎの言葉を入れるという構成は、遊仙を扱う楽府においてしばしば見いだされるものでもあった。例えば、『楽府詩集』に収録される「董逃行」古辞は、神仙の山の様子と伝教者との問答、それによって丸薬を獲得するという経緯を詠うが、その最後は「陛下長生老寿。四面肅肅稽首。天神擁護左右。陛下長与天相保守(陛下 長生老寿なれ。四面肅肅として稽首す。天神左右を擁護し。陛下長えに天と相い保守せん)」と、天子の長生を願う言葉で締めくくられている(27)。「其二」にはこういった直接的な表現は見えないが、柳永には他にも多くの褒め歌があることと、遊仙文学の二大潮流を考えた場合、「言祝ぎ」の側に傾くようにも思えるのである。

なお、「言祝ぎ」を詠うという側面からすれば、唐五代詞においても「願皇寿千千、歳登宝位」「願皇寿、千万歳、献忠心」と詠うような例はいくつも見られる(28)。ただし、それらは基本的に遊仙の枠組みを用いず、君王の徳や当世のすばらしさ、君臣相和す様、といった内容を繰り返すだけのものが多い。「言祝ぎ」を内容とする詞に楽府由来の遊仙という要素を加えたところに、柳永の新しさを読み取ることもできるだろう。

また、生涯官途において不遇であった柳永が、このような作品を作った理由を考える際には、宋・葉夢得『避暑録話』巻下に見える次の記事が参考になる。

柳永字耆卿、為举子時、多游狭邪。善為歌辞、教坊楽工、每得新腔、必求永為辞、始行於世、於是声伝一時・

柳永、字は耆卿、举子と為りし時、多く狭邪に遊ぶ。善く歌辞を為し、教坊の楽工、新腔を得る毎に、必ず永に求めて辞を為さしめ、始めて世に行わる、是に於いて声は一時に伝わる。

ようするに、新しい音楽を作るたびに、教坊すなわち宮廷の音楽所が柳永に歌辞を作らせていたというのである。そして、教坊が求める歌辞とは、当然皇帝や国家を言祝ぐ内容を含むものであったに違いない。とすれば、先に挙げた「玉楼春」や「其二」についても、それぞれ皇帝が道教祭祀を執り行った際に、宮廷の宴席などで歌うための歌辞として、教坊の求めに応じて作詞された可能性も否定できないのではないだろうか。

さて、「其三」が天界遊行、「其二」が国家皇帝への言祝ぎだとすれば、残りの三首は何を歌うのだろうか。この三首に共通するのは「宴」である。「其一」には「陪宴」、「其四」には「留宴鼇峰真客」、「其五」には「高会」の語が見え、それぞれの詠われる場面が宴会の席に関わっ

たものであることを窺わせる。では、それらはいったい何の宴であったのか。

まず「其一」では、前半で仙界において龍や雲を駆る神仙の姿が描き出される。これは、宴席へと向かう人々の姿であろう。そして後段でその宴の席へと描写が移り、そこで女仙の麻姑が語った言葉が綴られる。麻姑は、第二節の注釈でも示したとおり漢代に降臨した神仙で、十八才くらいの美しい女性の姿をしていたという。彼女は、自分が何度も蓬莱山を取り巻く海が陸になり、陸がまた海になるという現象を見た、と述べる。彼女のこの言葉は、後に「桑田滄海」或いは「桑田碧海」などの四字熟語となって知られ、一般に世の中が大きく変化することを意味する。しかし、ここでの重点はおそらく「変化」ではなく、それだけの長い時を過ごしたという麻姑の「長寿」にあると思われる。なぜなら、薛瑞生氏がすでに指摘するように、麻姑には「西王母の誕生祝いの宴席で、靈芝で作った酒を献上し、長寿を祈った」という民間伝説があり、祝寿を連想させる女仙として認識されていたと考えられるからである(29)。「陪宴」という語も、そのままこの伝説を想起させるだろう。とすれば、薛氏が言うように、この「宴」は西王母に比された女性の誕生祝いのそれと解するのが妥当ということになる。

「其一」と同じく、祝寿の作であることがより顕著に示されるのが、「其四」「其五」の二首である。この二首には、いずれも西王母にまつわる伝説が詠み込まれている。西王母は中国で信仰を集める最も古い女仙の一人であり、古くは戦国時代に成立したとされる『山海経』に既に記述が見える(30)。初期の西王母像というのは、ザンバラ髪で尻尾があるなど、およそ人間離れした形象であったようだが、道教が成立すると美しい女仙の姿へと変化した。

まず、「其四」ではその西王母の果樹園で栽培されているという「碧桃(仙桃、蟠桃とも言う)」が登場する。この桃は、三千年に一度熟し、食べると寿命が延びるという伝説で知られる。その貴重な桃を、西王母は軽々に摘み取ることをせず、「鼇峰真客」をもてなすのに使う、と「其二」は詠う。そして、第二節の注釈でも指摘したとおり、漢の武帝に仕えた東方朔がこの桃を三度も盗み食したという伝説を踏まえ、この宴に供された桃はたとえ東方朔であっても盗み食いしません、と言うのである。おそらく、ここにいう「鼇峰真客」は宴席の主人を、東方朔は柳永自身を指し、柳永は自分を東方朔に擬えて、「あなたのための大事な仙桃を、私がどうして盗み食いしましょうか」と述べているのではないだろうか。あるいは、「金母」が主人を、「鼇峰真客」がそこに列席する客人たちを指す可能性もあるが、その場合でも自分は東方朔のように桃を盗み食して、主人の気配りを台無しにしたりはしませんよ、という意図を窺うことはできよう。いずれにせよ、宴に供される仙桃を食べるという図式は、祝寿の作としてふさわしい。

次に「其五」には、そもそも直接「為寿」の語が使われている。こちらで用いられる西王母の伝説は、周の穆天子にまつわるものである。穆天子は崑崙山へ西征し、西王母に会う。西王母は穆天子をもてなす宴席を設け、そこで穆天子の不老長生を言祝ぐ「雲謡」の曲を歌った。

「其五」後半初句「一曲雲謡為寿」というのは、まさしくこの伝説を踏まえており、ここに描かれる宴の席で演奏される音楽を「雲謡」曲になぞらえて、祝われる人物の長寿を言祝いでいるのである。なお、冒頭二句にはともに昇仙したという伝説のある「蕭氏」夫婦と「茅」兄弟の名が見えることから、薛瑞生氏はこの宴席で祝われる人物を「人の母親」とし、その子どもが茅或いは毛姓、娘婿が蕭姓ではないかと推測する(31)。実際のところは不明だが、「其一」「其四」と比較して、「羽輪飄駕」「倒尽碧酒」「争撼」「踏碎」といった、やや意気軒昂、血気盛んな表現が目立つことや、「雲謡」で「為寿」されていることからすれば、誕生日を祝われているのは男性である可能性も十分にあるだろう。

さて、以上のように「其一」「其四」「其五」三首はいずれも、人の長寿を祈る「祝寿」の作と考えられる。このような「祝寿」の詩詞は、もちろん柳永以前にすでに存在する。「其二」のところでも取り上げたような楽府や詞も、広い意味ではこの「祝寿」の範疇と考えられるし、また唐代には皇帝や貴人に対する儀礼的な「寿詩」が多く作られた(32)。宋代以後、そういった儀礼的なもの以外に、士大夫間での誕生祝いが一般化し、それにともなって「寿詩」「寿詞」はさらに多く作られるようになっていく。そして、「巫山一段雲」三首は、「寿詞」の作例としては最も早いものの一つなのである。

このことだけでも、柳永詞は重要な存在であると言えるのだが、さらに注意しなければならないのは、「麻姑」や「金母(西王母)」を主とする女仙が、「祝寿」の詩詞に登場するようになるのは、おそらくこの柳永以後、とりわけ詞において顕著となる現象と考えられることである(33)。唐五代までの詩詞に「麻姑」たちが登場しないわけでは、決してない。しかし、特に「麻姑」についていえば、その外見的な特徴である長い「爪」に着目した表現か(34)、彼女が修行したという「麻姑山」との関わりの中で詠まれているのがほとんどであり、柳永詞が踏まえるところの「西王母への献寿」の伝説が顔を出すことはない(35)。管見の限りでは、柳永詞がこの伝説を詩詞に詠み込んだ、最初の明らかな例と言えることができるだろう。

そして、この柳永詞が登場して以後、南宋になると「麻姑」や「西王母」は、誕生日を祝う「寿詞」の中で頻繁に登場することになる。以下に例を幾つか挙げておこう。

麻姑行酒。萼緑華歌清韻裊。 (周紫芝「減字木蘭花」内子生日)

環佩響天風，香靄杯盤，更約麻姑侍。 (李彌遜「醉花陰」學士生日)

綺席來年誰與同，笑揖麻姑伴。 (楊無咎「卜算子」李宜人生辰)

このうち、李彌遜の作以外は祝われる人物が「女性」であることは、「其一」を検討した際にも言及したとおり、麻姑の「侍る」宴席が西王母の誕生日祝いのそれであるということに由来すると考えられる(36)。このように考えてくると、柳永が「麻姑」等女仙の伝説を用いて「寿詞」を作ったことが、後の「寿詞」に一つの典型を準備することになったとってよいのではないだろうか。ただし、「巫山一段雲」という詞牌自体は、以後「寿詞」を詠う詞牌としての位置を獲得するまでにはいたらなかったのであるが(37)。

以上、柳永の「巫山一段雲」について考えてきた。この五首は、詞という文字ジャンルに「遊仙」という新たな主題をもたらしたのみならず、内容的には南宋以後の寿詞に大きな影響を与え、一つの典型を形成することになった作品を抱える点において、非常に重要な意義を有するということができるだろう。

四、詞牌「巫山一段雲」のその後一道教と風景のうた

前節にも述べたように、宋では柳永以後「巫山一段雲」という詞牌が寿詞に用いられることはなかったし、そもそも北宋南宋を通じてほとんど作られることがなかった。しかし、この「巫山一段雲」は、却って金元代に多くの作例を持つことになった。

『全金元詞』には、「巫山一段雲」詞が八十八首収録される(38)。これは、唐宋の作例の実に六倍以上の数字である。だが、注意しなければならないのは、金元代に作例が増えるのは、決してこの詞牌で詞を作る詞人が増えたからではない、ということであろう。実は、詞人の数だけなら唐五代と同じく七名に過ぎない。作者名と作品数の内訳を、『全金元詞』の所収順に以下に示す。

王喆 二首 馬鈺 十三首 王丹桂 四首 趙孟頫 十二首
 李齊賢 三十二首 尹志平 十九首 姬翼 六首

この七名のうち、趙孟頫と李齊賢を除く五名は、全真教の道士である。しかも、王喆は王重陽の呼び名で知られる全真教の開祖、馬鈺こと馬丹陽は王喆の高弟七真子の一人、王丹桂・尹志平・姬翼はそれぞれ七真子の弟子や孫弟子と、いずれも全真教の重要人物といえる(39)。それに対し、趙孟頫と李齊賢は翰林学士や門下侍郎等を務めた文人で、李齊賢は儒学者としても著名な人物であった。

興味深いことには、作者が道士とそれ以外という二つに分けられるのみならず、両者の作例は格律の上でもぴたり分けることができる。第三節で「巫山一段雲」には後段の初句の文字数と押韻の仕方によって「5、5体」と「6、6体」の二つの格律があることを述べた。そして、道士たちの作例はみな「6、6体」であり、その他二人は「5、5体」と、決して混用されることはない。

さらに、題材内容の面でも両者ははっきりと区別される。趙李の作品は、趙が「巫山十二峰」の姿を一峰ずつ詠じた計十二首の連作、李が「瀟湘八景」「松都八景」の小題を持つ八首二組ずつ計三十二首の連作で、いずれも名勝の風景を描き、一種の題画詞に分類できる作品となっている。これに対し、道士たちの作品は彼らの立場からも推測されるように、道教の思想や教理に関する内容が主体となっており、趙李のように連作と認定できる作は少ない。

ようするに、詞牌「巫山一段雲」を用いた詞は、金元以降、大きく二つの道へと分岐していった、と言える。一つは文人による「5、5体」連作題画詞の系列、もう一つは道士たちによる「6、6体」道教詞の系列である。前者の発生については、特に趙の作は詞牌名から「巫山」を詠じるのに用いられたのではないかと容易に推測ができる(40)。では、後者はどうか。

道士が詞を好んで作ったことについては、中田勇次郎氏にすでに論考があり、それによると、彼らの詞の内容は道教の教理を主とし、それらは教化に利用されたのではないかという。また、師弟の間の唱和も盛んだったようで、それが禅宗の問答の如き形式となって記録され、道蔵に収録されたものも多い。また、中田氏は彼らの作品には柳永や蘇軾、黃庭堅といった北宋の詞人たちの影響が強いことも指摘している(41)。そしてこの「巫山一段雲」は、柳永詞の道士たちに対する影響を見て取ることが可能な、最も典型的な例の一つと言えるのである。

第一に、道士たちの作は全て「6、6体」で、柳永のそれと格律を同じくしている。もちろん、柳永以前の李暉にも同じ体での作品があるが、当時における知名度の高低は較べるべくもない。柳永は宋代にすでにその詞集が刊行されており、またその詞は宋朝の外にも伝わり、歌われていたとされている(42)。第二に、彼らの作品には「遊仙」の形式、すなわち仙界を遊行し、そのすばらしさを述べるという形式を用いたものが非常に多い。もちろん、これは彼らの詞が道教の教理を詠うという性質上、その他の詞牌の作品においても見られる特徴ではあるが、それでも「巫山一段雲」の各作品においてはそれがより一層顕著なように感じられる。このことは、柳永が「巫山一段雲」詞において「遊仙」の形式を用いたことと、決して無関係ではなからう。

「巫山一段雲」詞を最初に大量に作った馬鈺の作品には、そのことを如実に物語るものがある。「贈三一居士」との小題が附された次の五首を見てみよう(43)。

「巫山一段雲」

幹運清神境，修完耀洞天。九層台上聚祥煙。端坐碧霞軒。 開闡瓊林雅宴。賞玩個中深淺。咆哮金虎戲波濤。警動未成鼈。

「又」

玉女開金殿，金公鎖玉闌。真清真淨養胎仙。雲透坎離間。 貪看靈光上下。忘了之乎也者。神珠吐出九般霞。跨鶴赴仙家。

「又」

赤子餐青母，紅蛇啖黑龜。祥光瑞氣要成衣。尚自更持危。 調引姹嬰嬉戲。緊把玉闌封閉。一輪性月晃清霄。雲步訪三茅。

「又」

霞友無塵慮，雲朋絕事情。氣神相結淨中清。談笑大丹成。 好把碧桃采摘。專獻蓬瀛仙客。大家同共慶重陽。開宴一齊嘗。

「又」

休要呼師叔，相看若弟兄。煉心雲補玉京城。何必謁公卿。 因撫心琴益壽。謂飲刀圭戒酒。瑤台上面放瓊花。同去步煙霞。

第二節で取り上げた柳永の「巫山一段雲」と見比べて、最初に気づくのは五首全てが柳詞の次韻の作となっているということであろう。「其三」の後半三句目のみ、柳詞が「宵」字を用いるのに対して馬詞は「霄」字に作って異なるが、それ以外は全て同韻同字となっている。また、用語の上でもかなりの類似性を認めることが可能であろう（44）。ようするに、馬鈺は詞牌も詞韻も表現も内容も、柳永のそれを踏襲しているのであり、彼が柳永を強く意識した「巫山一段雲」詞を作ったことが、王丹桂以下の作品群を生み出す契機の一つとなったと考えるのは、あながち間違いではあるまい。

道教思想はそもそも非常に遊仙と結びつきやすい。先に言及した六朝・郭璞の「遊仙詩」以降、初唐の王績・盧照鄰などの遊仙詩には、道教の影響が強まり、道教語彙や修道過程、鍊丹術に関連する記述が増加していくことは、既に複数の指摘がある（45）。その意味では、道士たちの詩詞文に遊仙が主題として表れることは当然といえる。しかし、少なくとも詞という文学ジャンルで彼らが「遊仙」を詠うために、先例としての柳永「巫山一段雲」五首が果たした役割というのは、看過できるものではあるまい。

（五）小結

柳永「巫山一段雲」は、まず第一に「遊仙」という主題が詞においてまとまった形で表れる最初の作品である。決して連作ではないと思われるが、この詞牌で作られた五首が全て「遊仙」の要素を持つことは、柳永が当該詞牌を使用する際には必ず「遊仙」を用いるというルールを持っていた可能性を示唆し、興味深い。そこに詠われる内容は、「遊仙」の伝統に乗っ取りつつも、彼なりの新しさを窺うことができるものであった。

一方で、作られた時と場所を異にするであろうそれらは、柳永の詞集編纂の際に調別にまとめられ、詞牌名と「遊仙」という共通のくくりによって、あたかも一つの連作であるような顔をして並ぶことになった。『樂章集』の排列順で五首全てに次韻した金人馬鈺は、あるいはこれらを本当に「遊仙」を主題とする連作と考えていた可能性もあるかもしれない。そしてそのことは、とりもなおさず、全真教が勃興した金朝期の華北において、現行の『樂章集』と同じく調別で作品を排列した柳永の詞集が通行していたことをも意味していよう。

柳永の詞による題材の拡大が、後の詞壇に大きな影響を与えたことはこれまでから論じられてきたが、それらは多くの場合、閨怨と羈旅行役の二分野にほぼ特化した形での注目のされ方

であった。しかし、今回「遊仙」を主題とした同詞牌の五首をとりあげ、その内容を吟味したことで、それらが南宋の寿詞隆盛への画期を用意したこと、金元の道教詞が遊仙を詠うための一つのきっかけとなる作品群であったことが明らかになった。

柳永詞の中には、きちんと吟味されないままに「閨怨と羈旅行役」という看板の下に埋もれている作品が、他にもあるのではないだろうか。それを探ることを、今後の検討課題としたい。

注

- (1) 我が国における柳永研究の代表的な著書を挙げておく。詳しくはこれらの書をお読みいただきたい。村上哲見『宋詞研究—唐五代北宋篇』「第三章 柳耆卿詞論」（創文社、一九七六年）、宇野直人『中国古典詩歌の手法と言語—柳永を中心として—』（研文出版、一九九一年）。また、筆者も柳永に関する論考を書いたことがある。藤原祐子「柳永詞論」『中国研究集刊』第三十四号（大阪大学中国哲学研究室、二〇〇三年）、『草堂詩余』と柳永『橄欖』第十五号（宋代詩文研究会、二〇〇八年）。なお、我が国における詞学関係の著書・論文は、日本詞曲学会のHPに掲載される「日本国内詞学文献目録」が最も網羅的に集めているが、そこには柳永に関する専論が三十本余り見える。
- (2) 一例を挙げると、秋の夕暮れと客愁を詠った「八声甘州（对瀟瀟）」詞の語句は、「此語於詩句、不減唐人高处（此の語 詩句に於いて、唐人の高处に減ぜず）」と絶賛される（宋・趙德麟『侯鯖録』卷七等）。なお、以下、本稿において柳詞を含めた宋詞を参照・引用する際には、唐圭章編『全宋詞』（中華書局、一九六五年）を用いる。
- (3) 『全宋詞』が収録する柳永詞は、断句や存目を含めて二百十九首である。また、柳永詞に関する最新且つ重要な研究成果の一つである、薛瑞生『樂章集校注（増訂本）』（中華書局、二〇一二年）は、断句を含めて二百十五首を柳詞として認定しており、偽託とされているものをあわせて二百三十首程を収録する。柳詞の主題については、前注（1）所掲の宇野氏著書「第八章〔附表〕柳永所用詞牌一覽」に「題材」の項が設けられており、そこに記されているのが参考になる（二二五～二六三頁）。
- (4) 柳永の別集である『樂章集』は宮調別に詞を排列する体裁を採り、その下位区分は詞牌である。同じ宮調同じ詞牌であれば当然、同じ箇所にもまとめて収録されることになり、「巫山一段雲」も五首が並んで収録されている。また、張惠民・張進『柳永詞選注』（人民文学出版社、二〇〇七年）、王兆鵬・姚蓉『柳永詞』（人民文学出版社、二〇〇五年）、薛瑞生『柳永詞選』（中華書局、二〇〇五年）、謝桃坊『柳永詞選評』（上海古籍出版社、二〇〇二年）等、柳永詞の選注本にはこの五首を採らないものが多い。
- (5) 柳永は『宋史』に伝記がなく、経歴がよくわからないため、作品の編年が非常に難しい。前注（3）所掲の『樂章集校注（増訂本）』は、柳永詞の編年を試みているが、そこでも約半分の百首近くが「不編年」のまま収録されている。
- (6) 『宋史』卷七「真宗本紀」「大中祥符元年」の条に、「春正月己丑、有黄帛曳左承天門南鸕尾上、守門卒塗崇告、有司以聞。上召群臣拜迎于朝元殿啓封、号称天書。……六月己未、天書再降于泰山醴泉北」とある。ただし、薛瑞生は「重到」について、「然此首写於大中祥符五年十月所謂『聖祖』再降時」を指すとし、本詞を大中祥符五年に繫年する。なお、真宗に降されたとされるこの二つの天書は、側近の王欽若による捏造であったとされる。
- (7) 『海蟾』について、薛瑞生は宋・何蓬の『春渚紀聞』卷三「翊聖敬劉海蟾」の条を引き、劉海蟾という道士を指すとす。彼が仙人としての認定を受けたのが真宗の時代であるこ

とは確かであり、また彼には「佯狂して歌舞した」との伝説もあることから、「狂戯」との表現にふさわしいように思われる。ただし、彼が詩詞に読み込まれる例は管見の限り宋代にはなく、「海蟾」の語は全て「月」の意味で用いられている。金元代に入ると、道士の作中に数例見えるようになるが、これは劉海蟾が道教の中で地位を確立したためであろう。柳永は、「其二」に詠み込んだ天書事件など、時事に敏感ではあったと思われるが、ここで「海蟾」を劉海蟾のことと断定するにはやや根拠に乏しいように思われるので、本稿ではひとまず採らなかった。

- (8) 薛瑞生前掲書三六七頁、宇野直人前掲書二二六頁。
- (9) 梁・鍾嶸『詩品』巻中「晋宏農太守郭璞」「憲章潘岳、文体相輝、彪炳可玩、始變永嘉平淡之体、故称中興第一。『翰林』以為詩首。但『遊仙』之作、詞多慷慨、乖遠玄宗、其云「奈何虎豹姿」、又云「戢翼棲榛梗」、乃是坎壈咏懷、非列仙之趣也」。
- (10) 『漢書』巻二十二「礼楽志」「郊祀歌十九章」「赤鯨」。
- (11) なお、唐代には「仙界」＝「妓楼」という見做しが行われるようになり、唐・張文成の「遊仙窟」のような作品も登場する。美しい女性を仙女に喩えたり、女性の居る場所を仙郷に喩えるという描写は、詩詞に散見するが、ただしこれはあくまで「見做し」であり、所謂遊仙とは区別して考えるべきであろう。
- (12) 本稿において、唐五代詞を参照・引用する際は、曾昭岷・曹濟平・王兆鵬・劉尊明編著『全唐五代詞』（中華書局、一九九九年）を用いる。
- (13) 「歩虚詞」については、深澤一幸「歩虚詞考」（吉川忠夫編『中国古道教史研究』、同朋社、一九九二年）に詳しい。
- (14) 『全唐五代詞』が収録する遊仙詞としては、他に呂洞賓や張果老の作品があるが、使用される詞牌や作風から、ほとんどが後代の偽作とされている。
- (15) 『全宋词』が柳永より前に収録するのは和峴以下凡て十七名いるが、作品数としては潘閬が十一首残すが最多である。そのうち、和峴の「開宝元年南郊鼓吹歌曲三首」や、丁謂の「鳳棲梧」詞二首には、仙界に関わる表現が見える。ただし、前者は郊廟歌という性質上、一般の詞と同列には扱いつらい。また後者は仙界に遊ぶというよりはむしろ、現実の素晴らしい景色などを仙界に喩えた内容となっている。
- (16) 「巫山一段雲」は、『詞律』巻四、『欽定詞譜』巻五に収録される。
- (17) 『詞譜』は「6. 6体」を更に、前半の平韻と後半の平韻の韻部が同じか異なるかによって二つに分類するが、後代の作例を見ても両者は混在しており、同じ韻部を使っても良いし使わなくても良い、という程度の縛りであったと思われる。実際、『詞律』は区別していない。本稿も『詞律』の立場を採る。
- (18) 『文選』巻十九所収。その序文に「昔者楚襄王与宋玉遊於雲夢之台、望也。玉対曰、所謂朝雲者也。王曰、何謂朝雲。玉曰、昔者先王嘗遊高唐、怠而昼寝、夢見一婦人曰、妾巫山之女也、為高唐之客、聞君遊高唐、願薦枕席。王因幸之。去而辞曰、妾在巫山之陽、高丘之阻、旦為朝雲、暮為行雨、朝朝暮暮、陽台之下。旦朝視之如言。故為立廟、号曰朝雲」とある。なお、清代に編まれた『御選歴代詩餘』巻八「巫山一段雲」の按語に見えるような、「巫山高」に由来するという説もある。「巫山高」は宋・郭茂倩『樂府詩集』巻十六「鼓吹曲辞」に収録される漢饒歌の一つで、その古辞に「巫山高、高以大。…遠道之人心思婦、謂之何」と見えることから、「帰りたいという思い」を詠む際に、この詞牌を用いるのだと説明するのである。

- (19) 『全唐五代詞』一八三頁、四五七頁、五四〇頁、五九八頁。なお、後述の杜安世詞は客愁とともに柳或いは花を詠じた作、仇遠詞は閨怨を詠ったもので、巫山や雲雨の古辞を思わせる語は、直接的には用いられていない。
- (20) 宇野氏は前掲書附表で「巫山一段雲五首」とまとめており、顧之京・姚守梅・耿小博『柳永詞新釈輯評』（中国書店、二〇〇五年）は五首それぞれに注釈を施した後、最後に「講解」を置き、「従内容上看作于一時、都是写神仙生活的」と述べる。
- (21) 宋・王闢之『澠水燕談錄』卷八「柳三変、景祐末登進士第。……会教坊進新曲『醉蓬莱』、時司天台奏老人星見、史乘機薦之、仁宗大悦、以耆卿応制。耆卿方冀進用、欣然走筆、甚自得意、詞名『醉蓬莱慢』。比進呈、上見首有『漸』字、色若不悦。読至『宸遊鳳輦何処』、乃与御製真宗挽詞暗合、上惨然。又読至『太液波翻』曰、『何不言波澄』。乃擲之地、永自此不復進用」。宋・張舜民『画墁録』「柳三変既以調忤仁廟、吏部不放改官。三変不能堪、詣政府晏公曰、『賢俊作曲子麼』。三変曰、『祇如相公亦作曲子』。公曰、『殊雖作曲子、不曾道「緑線慵拈伴伊坐」』。柳遂退」。
- (22) 宋・胡仔『苕溪漁隱叢話』後集卷三十九所引嚴有翼『藝苑雌黃』「柳三変、字景莊、一名永、字耆卿、喜作小詞、然薄於操行。當時有薦其才者、上曰、『得非填詞柳三変乎』。曰、『然』。上曰、『且去填詞』。由是不得志、日与猥子縱游娼館酒樓間、無復檢約。自称云『奉聖旨填詞柳三変』」。
- (23) ただし、薛瑞生は本詞にみえる「三茅」を「其五」の「茅家三兄弟」と関連づけ、「以遊仙形式為人母祝寿而作」と解釈している。その可能性も否定できないが、その場合「九関斉閉」というような表現は、寿ぎの詞としてはややふさわしくないように思われる。
- (24) 薛瑞生前掲書一五三頁。
- (25) 『全宋詞』十九～二十頁。
- (26) 「送征衣（過韶陽）」詞「望上国、山呼鰲抃、遥爇炉香。竟就日、瞻雲献寿、指南山、等無疆。願巍巍、宝歴鴻基、齐天地遥長」（『全宋詞』十五頁）、「御街行（燔柴煙断星河曙）」詞「椿齡無尽、蘿図有慶、常作乾坤主」（『全宋詞』二十二頁）等がある。
- (27) 『樂府詩集』卷三十四所収（中華書局、一九七九年）。
- (28) 無名氏「採新月」（『全唐五代詞』八一六頁）、無名氏「献忠心」（同八八四頁）。
- (29) 薛瑞生前掲書三七六頁。なお、麻姑が西王母に誕生祝いの酒を献上するという伝説は、「麻姑献寿」と呼ばれ、年画など民間絵画の題材としてもよく知られている。
- (30) 『山海経』卷二「西山経」「又西三百五十里、曰玉山、是西王母所居也。西王母其状如人、豹尾虎齒而善嘯、蓬髮戴勝、是司天之厲及五殘」。
- (31) 薛瑞生前掲書三八二頁。
- (32) 中原健二「寿詞をめぐって」（『中国学志』頤号、大阪市立大学中国学会、二〇一二年）には、誕生日を祝う風習の成立と「寿詩」及び「寿詞」の発展について詳しい考察がある。また、宋代における寿詞については、王偉勇『南宋詞研究』「第三章、南宋詞之特色」「第十節多祝寿慶生之篇」（文史哲出版社、一九八七年）、青山宏「宋代自寿詞について」（『沢尻博士退休記念中国学論集』、汲古書院、一九九〇年）等に詳しい。
- (33) 顔進雄『唐代遊仙詩研究』（文津出版社、一九九六年）は、中唐以後の遊仙詩の特徴の一つとして「大量的女性仙子編織其中」を挙げている（四九八頁）。柳永の遊仙詞が女仙を登場させるのは、そうした流れの中で考えることも必要であろう。
- (34) 葛洪『神仙伝』「麻姑鳥爪。蔡経見之、心中念言、背大痒時、得此爪以爬背、当佳」。

- (35) 『文苑英華』巻九十七が収録する唐初・王勣の「遊北山賦」には「麻姑送酒」という表現が見え、これが或いは麻姑の献酒という伝説を踏まえている可能性はあるが、その前後に「寿」に関わる表現は見えない。なお、西王母と仙桃は、杜甫「千秋節有感二首其二」詩や李賀「河南府試十二月楽詞・其一十三・閏月」詩等に皇帝への献寿として詠む例が見えるが、多くはない。
- (36) 『全宋词』中、「麻姑」が登場する作品は柳永詞を含めて三十一首あり、その大半が南宋の作者による作品である。本文中に挙げたもの以外にも、「寿江古心母」「寿趙宰母」「寿両国夫人胡氏」等、女性に対する祝寿であることがわかる小題が附されたものがある。
- (37) 前掲青山論文には、寿賀詞によく用いられる詞牌として、「水調歌頭」「念奴嬌」「沁園春」等十五の名前を挙げている（二八七頁）。
- (38) 本稿において金元代詞を参照・引用する際は、唐圭章編『全金元詞』（中華書局、一九七九年）を使用した。なお、「巫山一段雲」は、金代には「金鼎一溪雲」の異名も用いられた。以下の内訳にはこちらの詞牌名での作品数も含む。道士の作る詞の詞牌に異名が用いられることについては、後注（41）所掲の中田氏論考を参照されたい。
- (39) 全真教及び七真子については、蜂屋邦夫『金元時代の道教：七真研究』（汲古書院、一九九八年）等に詳しい。王丹桂は馬鈺に師事し、尹志平は七真子丘处機に師事した。また、姬翼は七真子郝広寧の孫弟子にあたる。
- (40) 李齊賢の八景詞については、衣若芬「李齊賢八景詩詞与韓国地方八景之開創」（『中国詩学』第九輯、二〇〇四年）に、趙孟頫に倣ったのではないかという指摘が見える。
- (41) 中田勇次郎『読詞叢考』第Ⅱ部「九 道蔵に見える詩餘」（創文社、一九九八年）。また、柳永詞の全真教道士たちに対する影響については、黄幼珍「柳詞与全真道士詞」（『社会科学』、一九八八年〇四期）、孔傑斌「論柳永詞对全真道士詞伝播の影響」（『重慶科技学院学报（社会科学版）』、二〇〇八年〇二期）にも論じられている。
- (42) 宋・陳振孫『直齋書録解題』巻二十一「歌詞類」には「樂章集九卷」が著録される。また、宋・葉夢得『避暑録話』巻下「余仕丹徒、嘗見一西夏婦明官云、凡有井水飲处、即能歌柳詞。言伝之広也」と見え、その知名度が広く国外に及んでいたことが知られる。これに対し、李暉の二首は『尊前集』に収録されて伝わる。『尊前集』は宋初の編纂とされるが、編者や成立に関しては不明のことが多く、宋代には通行していなかったのではないかと考えられている。現存するのも明代以降のテキストである。
- (43) この五首は、『全金元詞』が馬鈺「巫山一段雲」詞の冒頭に置くものである。馬鈺は基本的に全ての作に小題があるため、同詞牌の詞で小題がないものは、前詞の同題の作と考えられる。本五首についても、二首目以下五首目まで小題はない（三三三～三三四頁）。
- (44) 馬鈺には「借柳詞韻」と自注のある詞が複数あり、中田氏によって既に指摘されたものに、「五靈妙仙」詞一首（「小鎮西」詞の韻を使用、三七三頁）、「玉楼春」詞五首（「玉楼春」詞五首の韻をそれぞれ使用、三七六頁）、「伝妙道」詞二首（「伝花枝」詞一首の韻を分割使用、格律に異同有り、三八六頁）がある。「巫山一段雲」のように、明示されずに柳詞が用いられた作品が、まだ他にもある可能性があるだろう。
- (45) 長谷川滋成『東晋の詩文』（溪水社、二〇〇二年）、金秀雄『中国神仙詩の研究』（汲古書院、二〇〇八年）等参照。また、中国においては六朝宋・劉義慶の『世説新語』「文学」注釈が引用する『続晋陽秋』に「郭璞五言、始会合道家之言而韵之」と見えるのが、遊仙と道教の結びつきに関する最も早い指摘の一つとして挙げられる。

藤原 祐子